

東洋大学井上円了研究会第二部会

井上円了と西洋思想

齋藤繁雄 編著

目次

井上円了と西洋思想

刊行にあたって……………西義雄…一

円了における西洋哲学……………福鎌忠恕…三

円了とスコットランド哲学……………齋藤繁雄…七

——ミューアヘッド倫理学と井上円了——

井上円了における現象即實在論……………新田義弘…九

井上円了とカント哲学……………馬場喜敬…一〇三

明治期の啓蒙運動とフランスの啓蒙思想……………坂本市郎…一四

円了における啓蒙思想の二重性について……………新田俊三…三

井上円了英文稿録解……………喜多川豊宇…二八

あとがき……………福鎌忠恕…二九

「井上円了と西洋思想」研究はしがき

西　義　雄

東洋大学創立百周年を記念して五六年前から学祖井上円了博士の研究が三部門に分かたれて進められてきていた。周知の如く、明治大正時代には、東都の私立大学に就いて、三田の経済、早稲田の法律、白山の哲学などと呼ばれ、東洋大学は私学として、早くからかなり有名であった。慶應の福澤、早稲田の大隈の学祖研究は盛んで且つ充分な成果もあげられていたが、東洋の井上に関しては、前二者に比して其の研究が充分であったとは言えない観があった。勿論、研究されてはいたが、洋大学祖の人物観が、前二者に比し可なり茫洋としていた感じは免れなかった。其の理由は、哲学が諸学の本であるとせられるから、円了の著作も、哲学・心理・教育・社会・宗教等々と多方面に亘り幅が廣い上に、其の数も単行本だけでも百三十有余に及ぶ多量であり、従って入手の困難のためもあったからであろう。筆者は昭和の初めから直接間接に洋大に関係を持ち、学友も多いので、既に二十数年前から学校当局の理解のもとに、東洋学研究所の開設と同時に学祖の研究室も併置し、特に洋大八十周年記念に際しては、学友二名と共に、学祖の郷里や長岡高校などの視察にも行ったりして、筆者なりにこの研究には心掛けていたのであるが、誠に慚愧の至りながら、学祖哲学の真髄には充分触れるに至らなかった。然し此度、第三部会研究員の御努力で、学祖の多くの著作も手にし、其の哲学の真相に接することを得たので、其の研究の一端を第一部会研究の報告として呈出したのである。

所が最近神作学長から学祖研究会第二部会の「井上円了と西洋思想」の総合研究報告を頂いた。此に依り、斎藤

教授等八人の方々の研究成果の要旨を拝見する事が出来、ために更に多く啓発されるに至った。其の中で特に気付いた点の一つは、学祖は東大在学第三学年の四月から「哲学要領」の原稿を発表し始める程、東西の哲学に深い理解を示されるに至っていたのに拘らず、東大の卒論としては、「人間の性悪は社会を善くする事に抛り矯正し得る」とする荀子の性悪説「讀荀子」を呈出された事に關し、其の意義を説明されておる事であつた。此の義は一般に看過され易い面であるが、其の基本原理の説明は、学祖の人間觀の内面を知るのに大切であらう。

次に学祖の理想であつた東西文化の融合による新哲学の創立説は、決して單なる預言的思想と見る可きでなく、近代日本思想史の全面的見直しの一貫として再検討すべきであると注意されておること、並に、学祖が四聖の一人とされたカントは、十九世紀の英國新カント学流の解釈中に於けるカント觀によるが、斯る見方は現在西洋でも再び問題化されていると指摘されていることである。最後に、学祖が現象即實在論を説き、「真如自体に存する力が物心兩境を開き、萬象萬化を生ず」とせる点を説明し、更に現象上の概念と觀の方法と、現象と真如との間に成立つ「相含」の論理觀の重大性を指摘されるに至っている。實は此の最後の指摘こそ、学祖が、真如哲学説としての「物心同体論」或は「物如心如々相含説」を重視し、完全な中正哲学説として高唱された所でもある。而かも此の点は筆者が接した従来の学祖の紹介中では、充分な評價がなされるに至っていないかと思ふ。

以上の諸点から斎藤教授外七名の研究員諸士の「井上円了と西洋思想」研究成果は、誠に注目すべきであり、推奨さるべきであると確信するに至つたのである。

井上円了學術総合研究總括責任者
東洋大学名誉教授

「井上円了と西洋思想」あとがき

福 鎌 忠 恕

本「井上円了と西洋思想」は井上円了総合研究・第二部会の最終的報告書である。本総合研究公刊に当り、東洋大学名誉教授西義雄先生より、「はしがき」を載くことができたことを、まず全研究担当者に代って心から御礼申し上げたい。事実西先生こそ、東洋大学百周年記念を一応の目途として、井上円了総合研究を提案・推進された筆頭の発起人であらせられた。先生の御信念に依れば、円了思想に関する一切の誤解の根源は、円了の西欧思想攝取に関する認識不足と、円了の生きた時代についての歴史的理解の欠如にあるとされた。先生は中にも「哲学は諸学の基」である、という円了宣言の「哲学」について、西洋思想の面から、その真意を解明してほしい、と力説された。このようにして、「井上円了総合研究」の三部会が発足し、西先生の御指名により、私が第二部会代表の重任を負うに至った。

その後各部会代表者の交代、その他さまざまな事情から、第二部会においても研究テーマに若干の変動は見られたが、年度毎に二、三回の総合討論会、部分的発表会等々を経て、今回それら一切の部分的報告書を総括して、七名の研究員による七論文が完成した。

それぞれの論文について、自画自讀する愚は行いたくないが、これらすべての研究報告書は、いわば全研究員の協同研究の成果であり、それらの討議に数回参加して載いた西先生の貴重な御示唆に改めて衷心からの感謝の念を

表明したい。明治啓蒙期における「哲学」というテーマの性質上、こんにち言う社会・人文諸科学者の協力が必須である、との視点から、哲学、現象学、社会学、経済学に至る幅広い研究員の構成となり、それなればこそ、かなり斬新な成果を挙げることができたと確信している。私自身の報告書は、その意味で他の六報告書の総括の意味をも持っており、それを前提にそれら六報告書も執筆されていることを、専門家には蛇足ながら付記しておきたい。

最後に、私の退職後、第二部会研究公刊の責任者として本報告書をまとめられた齊藤繁雄教授を筆頭に、長年に亘り、一種の「妖怪」とも言うべき変幻自在な円了思想に、それぞれの分野より取組んでここまでの成果を挙げて載いた全研究員に心から感謝したい。それと同時に本報告書が単に東洋大学関係者のみにではなく、広く一般に読まれて、明治思想史における井上円了再認識の契機になることを確信し、かつ期待している。

井上円了學術総合研究
第二部会代表者

執筆者（執筆順）

福鎌忠恕	東洋大学名誉教授
齋藤繁雄	東洋大学文学部教授
新田義弘	東洋大学文学部教授
馬場喜敬	東洋大学文学部非常勤講師
坂本市郎	東洋大学経済学部教授
新田俊三	東洋大学経済学部教授
喜多川豊宇	東洋大学社会学部助手

井上円了と西洋思想

一九八八年八月一〇日発行

東洋大学井上円了研究会第二部会
齋藤繁雄 編著

発行者

東洋大学井上円了記念学術振興基金
運営委員長 神作光一

東京都文京区白山五十二八―二〇
電話〇三（九四五）七五六四

教務部研究助成課

印刷 株式会社キタジマ

